

# 西日本の渡来人—研究ノートとして—

安藤信策

## 1. はじめに

周知のように私達が歴史を立体的に復元するためには、文献的歴史学と考古学そして民族学・民俗学の三つの学問研究の成果を総合しなければならないと考えられている。さらに地理学や、学問としての評価はまだ十分とは言えないが地名研究の成果も過去の復元の手掛りを与えてくれるのである。古代の日本文化の発展に大きな寄与をした渡来人集団についての研究は歴史学を中心としてすでに多くのことが明らかにされている。

渡来人と我が国の古代について画期的な研究となった上田正昭氏の『帰化人』（昭和40-1965-年・中央公論社・中公新書）においても文献と発掘成果とを総合的に取り扱われている。なかでも「好太王碑」に窺われる紀元391年（辛卯年）に高句麗軍と百済とこれを救援した倭軍が激突し、倭軍が惨敗を喫したことが、その後に馬や馬具などの馬の文化を我が国に導入する大きな契機となったとする指摘は大変興味深いその一例である。

こうした点を踏まえながら拙稿では渡来人集団の移動という問題を考えてみたい。西日本に範囲を広げて考えることは浅学の身では冒険ではあるけれど、今回のテーマに少しでも近づくためにあえて試みる次第である。

## 2. 加耶からの須恵器工人の移動

人々の生活必需品である土器が高温焼成によって硬質の須恵器へと変わったことは我が国の文明化の大きな一歩であった。それをもたらしたのは渡来人であり、発見されている朝鮮半島系の陶質土器の焼成窯はその技術の移動を示している。そして陶質土器の窖窯の起源地は朝鮮半島東南部の、加耶であることが明らかになっている。西谷正氏は「海を渡って来た陶人たち」において陶質土器の窖窯の起源地は朝鮮半島東南部の加耶に求められるようであるとした。（特別展『海を渡って来た陶人たち』吹田市立博物館（平成5-1993-年・展示図録）

従って図録において紹介されている北九州から瀬戸内沿いに近畿地方に至る陶質土器の窯跡の分布は、加耶からの技術者集団の移動の状況を示唆するものであろう。窯跡は比較的から遠くない丘陵に営まれているとのことである。おそらく船によって移動したの

ではないだろうか。さらに重要な点は異国の地に上陸して一定期間居住し陶質土器の生産を行ったとすれば、当該地を支配する豪族の許可と協力が不可欠であっただろう。むしろ当該地の豪族の積極的な招来への働きかけがあったとも想像できる。

特別展において紹介されている遺跡を残した集団は同一であったとは限らない。同じ技術者集団が順次移動した場合もあれば、同じ技術レベルにある別の集団が移動したのかもしれないが確かことは分からない。

遺跡を辿ってみると、九州北部では山隅窯跡、小隅窯跡、八並窯跡から成る朝倉古窯跡群、福岡県京都郡豊津町の居屋敷窯跡、福岡県筑紫野市の隅・西小田地区窯跡群などの古窯跡群がある。

最大級の前方後円墳が築かれ畿内政権との関わりの深い吉備地方も渡来人の主要な上陸地であったと見なされている。岡山県倉敷市の菅生小学校遺跡からは5世紀前半の韓式系土器が多く出土し、陶質土器の形状をした土師器など陶質土器との技法上の交流が窺えるという。広島県下の最大級の前方後円墳である全長92mの三ツ城古墳からは最古式の須恵器と見られる大型の器台・甕が出土している。また兵庫県姫路市の宮山古墳は加耶系の墓制に強く影響された人物の墓と見られており、播磨地方最古の器台や双耳付高坏などの陶質土器が出土している。四国においても香川県三豊郡豊中町の宮山1号窯跡から陶質土器が出土している。小型品を主体とした器種構成が豊富で、比較的長期の操業が想定されている。香川県高松市の三谷三郎池西岸窯からは甕を主体とする陶質土器が出土している。

大阪平野においては北部の大阪府吹田市の吹田32号窯跡から陶質土器が出土した。補修の痕跡が少なく比較的短期間の操業と考えられている。この窯の製品は上述の香川県三谷三郎池西岸窯の出土資料に酷似していて陶工の技術的系譜が想定されている。

大阪平野東部では大阪府南河内郡河南町の一須賀巣須恵器窯跡群がある。金剛・葛城山系の一須賀古墳群の中に分布している窯跡群である。

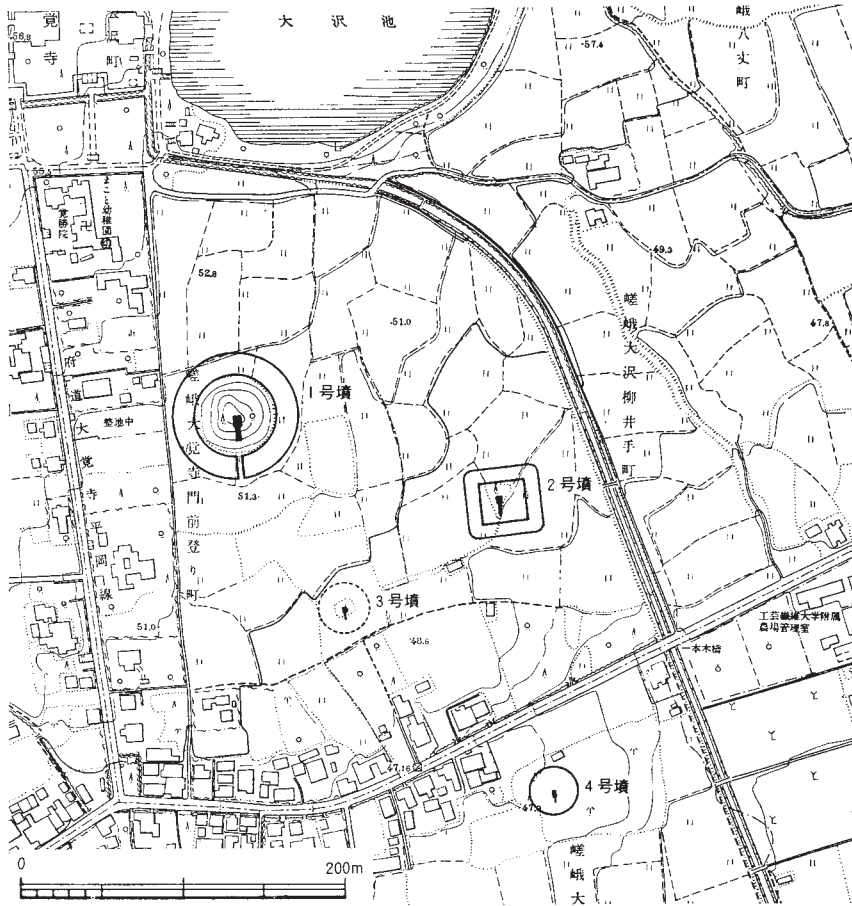
そして大阪平野南部の泉北丘陵の陶人たちは倭政権の支配下で丘陵一帯を占有して陶邑窯跡群を営み、窯を大型化し、複数の陶工集団によって大量生産を行ったのである。大阪府堺市の大庭遺跡は初期須恵器の焼成窯として知られる陶邑TK73号窯跡の西側にあり、住居跡から初期須恵器と共に朝鮮半島系の土器も出土し、渡来直後の人々のムラと想定されている。また紀伊地方は朝鮮半島系の陶質土器が出土する遺跡が多い。これは岸俊男氏が明らかにしたように、紀氏が倭王権の朝鮮半島への軍事を含めた航路の確保に大きな役割を果たしたことと関連するものであろう。和歌山市の楠見遺跡、鳴滝遺跡、鳴滝古墳群などから陶質土器が発見されている。

加耶地方は鉄器の原料の入手地でもあったし、倭政権にとって大変重要な地域であるの

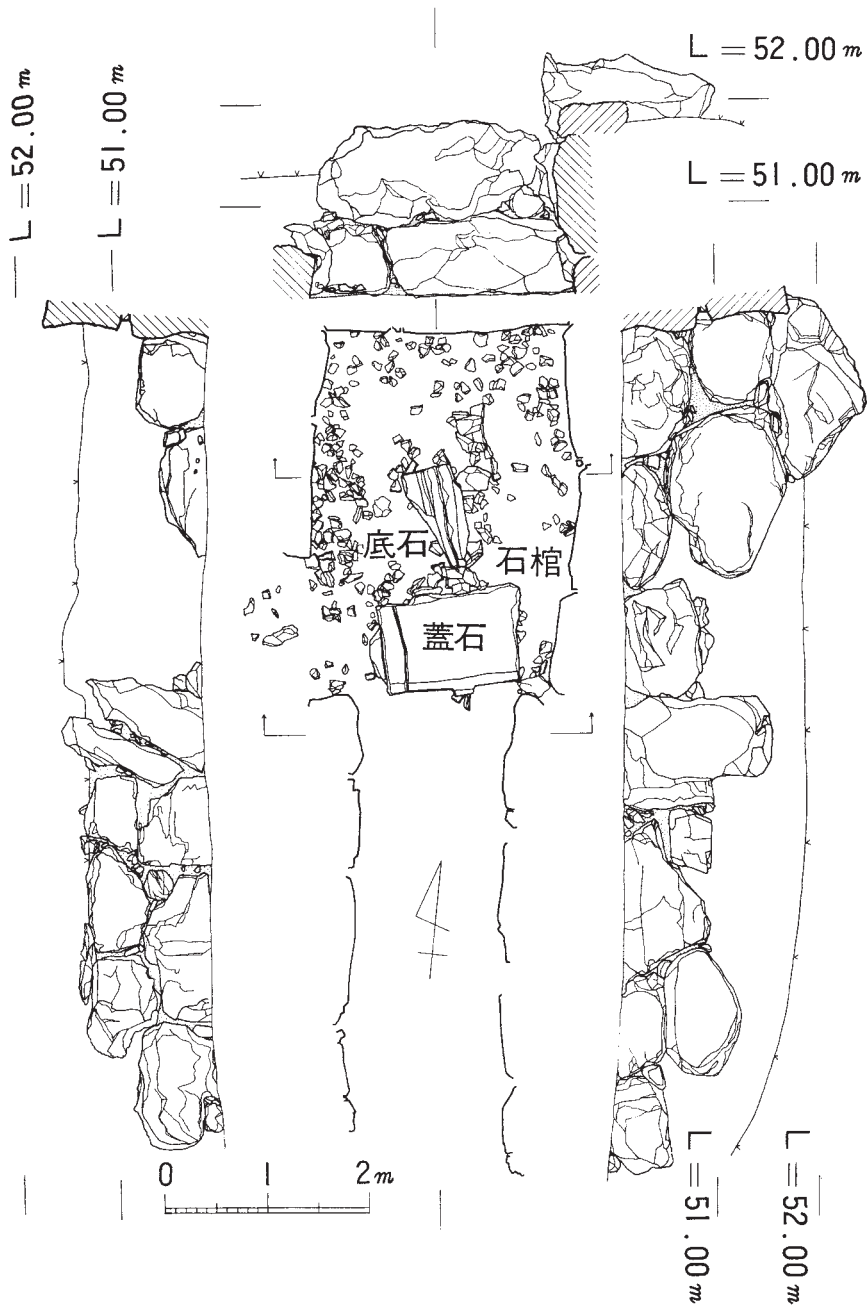
で、双方の多くの交流がなされた地域であったと想定されるのである。

### 3. 秦氏と嵯峨野の古墳

京都府下で最も良く知られ、また新たな技術の導入や平野の感慨や開発、古墳の造成や寺院の建立などに重要な役割を果たしたのは秦氏である。嵯峨野には多くの古墳が築かれており、古墳の規模によって三つの立地に分かれている。北方の丘陵上あるいは丘陵裾の小規模古墳、その下部の台地上の中規模古墳、そして平野部の大規模古墳である。大規模古墳の清水山古墳、天塚の順に築かれたと推定され、天塚からは6世紀前半の須恵器が見つかっている。原野であった嵯峨野に居住した秦氏は葛野大堰を築いて治水に成功しこの地に大きな勢力を持ったのである。7世紀の蛇塚は奈良県明日香村の石舞台古墳に匹敵する巨石墳として知られており、近くには秦氏の氏寺として広隆寺が建立される。日本書紀推



第1図 大覚寺古墳群位置図



第2図 大覚寺3号墳(南天塚古墳)石室実測図

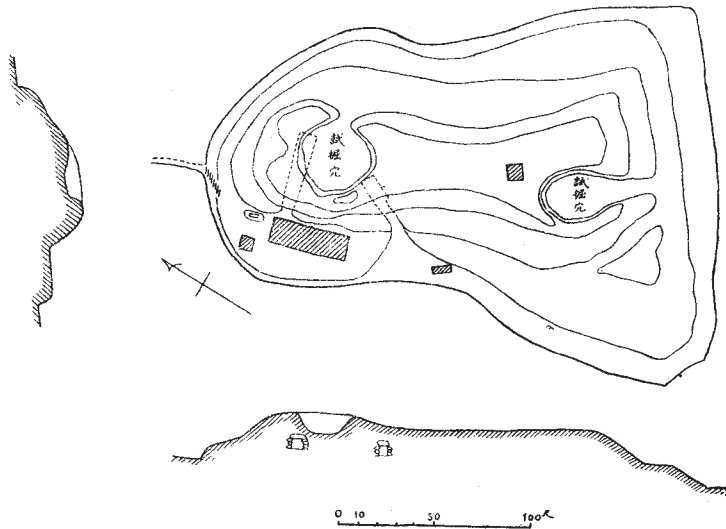
古天皇紀十一年(622)十一月条に秦造河勝が皇太子所有の尊い仏像を貰って蜂岡寺を建てたと記される。また朝野群載承和四年十二月十二日広隆寺縁起によれば蜂岡寺はもと九条川原里に建立され後に現在の場所に移ったことが知られる。また推古三十一年秋七月には新羅が大使奈末智洗爾を任那が達率奈末智を遣わし、佛像一具、金塔と舍利、観頂幡一具などたてまつった。仏像は蜂岡寺に置くことになったという。広隆寺の本尊・弥勒菩薩半跏像は創建時の皇太子所持の仏像ではなく新羅からおくられた仏像であろう。この像は韓国扶余国立博物館蔵の金銅弥勒菩薩半跏思惟像と瓜二つと言われる。この像はかつて李王家の徳寿宮美樹館に所蔵されていたもので、百濟説・新羅説両説がある。今のところ断定はできないものの、新羅半跏像とみる説を支持したい。

秦氏がいつ頃渡来したかは明確ではないが、欽明天皇即位前期に説話的文章があり、天皇が幼い時、夢に人が現れて秦大津父という者を寵愛すれば大きくなってから必ず天下をにぎることができるだろうと言った。そこで広く探させたところ山背国紀伊郡深草里にその名の人が見つかった。そこで側近として仕えさせ天皇の寵愛を受けたので、大津父は富み栄え、天皇が即位すると大蔵の役人に任命されたという。関晃氏はこの説話から、山城の深草の地に秦氏の一部が居住していて、大蔵と関係していたことが知られると述べている『帰化人』(昭和41-1966-年・至文堂・日本歴史新書)。仏教公伝は日本書紀・欽明天皇十三年(552)に見えている。この頃、秦氏が深草に居住していたことは明らかであろう。秦氏は京都盆地の鴨川、桂川などの氾濫原の開拓の中心となり、賀茂・松尾・稻荷などの神社とも深い関係を持ったのである。

上原真人氏は「お稲荷さんより古い稲作」(伏見稲荷大社『朱51号』平成20-2008-)において、京都府伏見区の深草遺跡出土の木製品等を分析した。そして秦氏の先祖を含む渡来人たちが携えて来た新しい農具によって古墳時代中期に農具体系は大きく変貌したとする。また近年、古墳時代前期末から中期初の馬鍬が発見されおり、馬が耕作に使用されるようになったことを指摘している。深草地方に進出した秦氏の活躍を示すものであろうと思われる。

秦氏と新羅との関係を示す古墳からの出土品が発見されている。それは台地上の中規模古墳群の一基である大覚寺3号墳の比較的大きな横穴式石室内から見つかった新羅土器である。安藤信策「大覚寺3号墳発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財概報(1976)』)の中で報告している。

この土器は貼り付け高台を持つ壺で頸部より上を欠くものである。頸の下部までの高さは9.0cm、胴部最大径15.0cm、最大径の位置の高さは4.5cmと胴が張った形をしている。肩部は浅い凹線で二つに区画され、上部はヘラで三角形の文様を下部はスタンプで上の開



第3図 葛野郡太秦村天塚外形実測圖

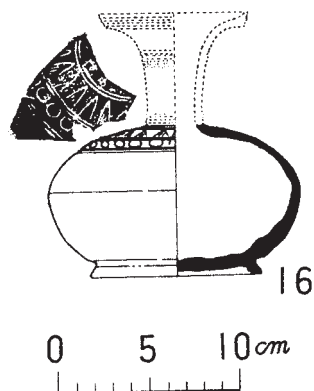
いた円文を施している。薄手で焼成の良い陶質土器である。この土器は吉田恵二氏(当時・奈良国立文化財研究所勤務)が慶州古墳保存会蔵の瓶によって復元・実測していただいた。改めて吉田氏の友情に感謝したい。

小田富士雄氏は対馬及び北部九州発見の新羅系陶質土器を集成し文様等を分類分析した。(古文化談叢第5集)そして長径壺については大覚寺3号墳の新羅土器の年代・7世紀初頭が九州編年による初見とも矛盾しないので、朝鮮での「新羅一統期様式」の形成は7世紀初頭以前の6世紀末頃までに出現していなければならないとした。

江浦洋氏は統一新羅系土器を出土する遺跡を5パターンに類型化した。すなわち①古墳等の墳墓関係遺跡、②藤原宮・平城宮の他、鴻臚館遺跡等の官宮施設に関連する遺跡、③四天王寺等の寺院からの出土、④太井遺跡・西橋遺跡に代表される金属製品の加工・生産に関係する遺跡、⑤免の内台遺跡に代表される東国に所在する集落遺跡。そして出土の背景を考察している。墳墓遺跡については大覚寺3号墳の造営者を秦氏として、秦氏が新羅系の渡来氏族であることを傍証する点には、秦氏の分布と統一新羅系土器の出土地が一致する可能性も示唆されるとした。ただし北部九州においては多くが群集墳中の一古墳、あるいは数基の古墳から見出されており、それが郡中で特別優位な状況を示すものは少なく、しかも他の遺物から渡来人をその被葬者とする根拠は見出し難いとしている。

官宮施設関係遺跡の場合は、国家レベルでの使節団の往来等に搬入の背景を求めておくとした。寺院遺跡の場合は新羅系の技術者が寺院の造営・修復に関与した結果であるこ

とも、二次的に寺院に持ち込まれたこともありえるとしている。金属製品の加工・生産に関する遺跡の場合は、当該期における金属加工面において新羅をはじめとする大陸の優位性から渡来系技術者が招来することも多かったことは充分考えられるとした。その事例として大阪府南河内郡美原町太井遺跡と奈良県明日香村西橘遺跡を紹介している。そして東国集落出土の統一新羅系土器は間接的に持ち込まれたものではなく、当該地の農地の開墾・経営に携わった新羅人が直接的に新羅より持ち込んだものであるとした。江浦氏の考察によって新羅からの渡来者



第4図 大覚寺3号墳出土新羅土器

が、それが秦氏と関わるものかは判別できないものの、政権の中枢部をはじめ各地で寺院の建立や産業の発展に寄与したことが想定されるのである。

なお緒方泉氏は福岡県から栃木県に及ぶ新羅土器の出土地を集成され72の新羅土器出土地を紹介した。『第26回埋蔵文化財研究集会「古代の対外交渉」追加資料発表要旨』（平成20年－2010）より。

京都府下では陶質土器の窯跡は見つかっていない。しかし丹後地方の古墳から陶質土器が発見されていることは特筆される。増田孝彦氏が報告した陶質土器である。（増田孝彦「奈具岡北古墳群発掘調査概要」・京都府埋蔵文化財調査研究センター『平成7年度埋蔵文化財概報』）

平成7年度に発掘調査が行われた奈具岡北1号墳からは陶質土器が出土した。器種は蓋付のものを含めた高坏が8点であった。増田氏によれば古墳の年代は5世紀初頭から前半に位置づけられると言う。陶質土器をもたらした被葬者はおそらく倭政権に従って海を越え朝鮮半島に渡っていると想定されよう。丹後の豪族が活躍したのは半島のどの国との戦いであったのだろうか。紀元391年（辛卯年）に高句麗軍と百済と、そして百済を救援した倭軍とが激突した戦いであった可能性も十分にあると私は考える。

#### 4. 朝鮮半島の諸国との交流の背景

西川寿勝・田中晋作両氏の共著『倭王の軍団（新泉社－平成21年－2010－）』によれば日本の前期古墳から出土する筒形銅器は朝鮮半島東南部地域で制作されたか、もしくは同地を経由して日本列島にもたらされたとの見解を示した。朝鮮半島ではその出現からまでヤリや鉾の石突として副葬されているという。両氏は百舌鳥・古市古墳群を主体とする勢力



第5図 太秦村天塚古墳全景

から、大和盆地北部の佐紀古墳群と馬見古墳群を中心とする勢力へと政権の主導権が移り、この勢力が筒型銅器に導入や他の服属した地方豪族への供給に中心的な役割を果たしたと考察している。それは鉄製短甲を含む整った武器の所有し、また刀剣ややりを多量に保有することで軍事的優位性を維持するためであった。この課題に応じて、それらの武器の入手を担ったのは、前期後半の畿内とその周辺で、鉄製短甲を含む整った武器の組み合わせの武器と筒型銅器を持つ振興の中小規模の古墳の被葬者であり、朝鮮半島東南部地域性の勢力との関係を実質的に担ったとしている。京都府下では京丹後市のカジヤ古墳、南丹市の(伝)中綴古墳、亀岡市の穴太古墳群31号墳から筒型銅器が出土している。両氏の見解に従えば、これらの古墳の被葬者は海を渡って朝鮮半島東南部地域へと赴いた人々だったのである。

白石太郎氏は『考古学からみた倭国』（青木書店・平成21年－2009年－）において倭の国家形成において朝鮮半島の諸国との交流・交渉が大きな役割を果たしていたことを大局的に論じた。鉄器生産の原料となる鉄は弁辰、後の加耶地方の鉄資源に頼っていた。そして氏は半島の鉄資源をはじめとする先進的な文物の入手ルートの支配権をめぐる欠く確執が日本列島における政治連合形成の直接的契機となったとされている。

また5世紀代の日本列島の文明化の大きな要素として騎馬文化受容がある。それまで全く関心を示さなかったにもかかわらず、5世紀には競って騎馬文化を受容し、それまで無





第6図 清水山古墳

かった馬具の副葬が始まることとなるのである。5世紀代には大規模な牧が東日本にまで多数設置されたと想定されることが考古学的調査・研究の進展にともなって想定されるようになったという。『延喜式』にみえる信濃の大室牧に関連すると思われる長野市大室古墳群には5世紀の合掌形石室と呼ばれる竪穴系横口式石室が見られる。合掌形石室は7世紀の百済にみられ、年代差はあるものの大規模な牧の設置が百済などの技術援助で行われたことと関連するとされている。高句麗の南下という国際的な大きな危機に直面したことを契機に倭人は騎馬文化を受容するが、これを援助したのも高句麗南下という大きな危機に直面していた百済や加耶諸国であったとされる。氏はこのように日本列島の文明化や国家形成の特質を、アーノルド・トインビーの「挑戦と応戦」の論理がそのまま適用できると言われている。朝鮮半島の文化や中国文明との「遭遇」が日本列島の文明化をもたらしたということができるとされる。東アジア世界を広く展望した卓見と思われる。

「挑戦と応戦」はトインビーの名著『歴史の研究』の基本概念の一つとされる。『歴史の研究』は最初の3巻が1934年(昭和9)に刊行され、最終の12巻は1961年(昭和36)に刊行された全体で6000頁を越える大著であるという。D. C. サマヴェルによる縮刷版が刊行されている(長谷川松治訳『トインビー著作集』—歴史の研究Ⅰ～Ⅲ—社会思想社—昭和42(1967)刊行)。その3巻全体で1621頁ある。「挑戦と応戦」は第Ⅰ巻の第2篇文明の発生の第5章に書かれている。文明の発生や発展にもこの挑戦と応戦は重要な要素となっているという。「エジプト文明の発生」の項では、G. チャイルドの考古学的知見を援用しつつ、この地域の旧石器時代の未開社会が乾燥化という大きな自然条件の変化を経験する中で、二つもしくは二つ以上の文明が出現したとする。「結局、居住地も生活様式も変えなかった連中は乾燥化の挑戦に応じなかったために、絶滅という罰を受けた。—中略—五

番目に、そして最後に乾燥化の挑戦に対して、居住地と生活様式をともに変更して応戦した集団があった。そしてこの類例の少ない二重の反応こそ、しだいに姿を消してゆくアフラシア草原の未開社会のいくつかからエジプト文明とシュメル文明とを創造した動的な行為だったのである。一中略一ところが実際は、その冒険は、開拓者が抱いたどんな楽観的な期待をも越えた、すばらしい成功をおさめた。自然の気まぐれは人工によって制御された。定まった形をもたなかったジャングル沼沢地帯は姿を消して、整然と配置された掘割と堤防と畑が出現した。荒地は開かれてエジプトとシナルの国土が造営され、エジプト社会とシュメル社会がその壮大な冒険を開始することになった。」と記述されている。

挑戦と応戦は人類が経験してきた深いドラマだったことが窺える。時代が与える困難という挑戦に対して応戦することによって人類は次の発展した段階へ進むことが出来たのである。歴史上直面するさまざまな危機や課題という挑戦を受け、古墳時代の人々も解決に努力し応戦を続けてきた。それは中国文明そしてその継承者である朝鮮半島の諸国の文明に遭遇し挑戦を受けた倭人達が、積極的にそれを受容し自国の文明化をはかった応戦の姿であり、ダイナミックな歴史像がそこから浮かびあがってくるのである。

## 5. 高句麗人・百済人の技能と移動

高句麗との関係は冒頭に挙げた辛卯年の敗戦の史実でも知られるように当初は良好ではなかった。しかし高句麗が唐の侵攻によって滅亡する668年9月の前後からは高句麗からの渡来の人々が多くなったとされる。当初の渡来者は畿内や周辺の地域に移住が許され発展していったが、天武・持統朝以降には百済人、新羅人、高句麗人が遠隔の武蔵国、下野国、常陸国など関東への移住が進められ、当地の開発を担ったのである。

井上満郎氏は欽明天皇三十一年(570)に初めての高句麗国からの公式使節の日本訪問があったこと、使節は加賀国江沼郡に到着しそこから都である「泊瀬柴籬宮」に向かう途中、「山城国の相楽郡」に相楽館を建てて迎接したことを述べている(『秦河勝』(吉川弘文館・平成23年-2011年-人物叢書)。そして相楽館の設置は、上粕(木津川市山城町)、下粕(相楽郡精華町)や町村合併前の高句村などの地名が存在するように、高句麗系渡来氏族の濃密な居住地であったとされる。

高句麗系の具体的な遺跡・遺物は見つかっていないものの、井上氏の指摘や、山城町高麗寺跡の存在など、この地に高句麗系の人々のムラがあったことは疑いない。

また百済人の渡来の問題であるが、先に挙げた高句麗軍との戦いや、後の白村江の海戦など百済を救援する為に派兵を行っていることに示されるように大和政権と親密な関係にあったのは百済である。前述の『帰化人』にも奈良県天理市の石神神宮の「七枝刀」はそ

の銘文の検討から泰和4年(369)に百済王(近肖古王)と世子が倭王のために造った大刀と推定されている。また大和朝廷の文書や外交を担った大和の文氏(東文)と河内の文氏(西文)は氏族の伝承から百済からの渡来人であろうとされる。そして馬文化の導入も西文氏が携わったと考えられている。仏教伝来にも百済は大きな役割を果たした。百済人の活躍も多岐に渡っている、今後の研究課題としたい。

## 6. 結びとして—文明化の歴史と今日の国際協力—

我が国は旧石器時代や縄文時代そして弥生時代においても、日本海を渡って朝鮮半島から、あるいは中国から新たな文化を取り入れることによって集落や小国家を發展させて来た。そして今回概観したように、古墳時代には渡来の集団によって我が国にさまざまな技術や仏教・儒教などの信仰・思想が伝来したことにより畿内を中心として有力豪族をはじめ地域の集落のあり方が大きく変化したのである。外来の文化をうまく取り入れて自家薬籠中のものとする我が国の人びとの特技が古代から発揮されていたのであろう。

隣国との関係が平和であり、互いに欠如を補い合い助けあうことは今日の大きな課題である。近未来において人口の増加、温暖化による気候変動での食糧の不足、資源の枯渇によって多くの国々が資源を争う過酷な時代が到来するかもしれない。北極と南極の氷を溶かして海面を上昇させている温暖化の進行こそ現代が受けている最大の挑戦ではないだろうか。トインビーの説に従えば、挑戦に応じて新しい文明を創造するという応戦を怠り、安穏な現状に留まろうとするならば、その未来は大変暗い。戦乱の時代を避け、平和な未来を築くための新たな文明を、多くの国々が協力して創造する事を切実に願うのである。

馬場悠男氏はNHKのラジオ講座の最終回において「地球文明の崩壊」という項目を立て、人類の長い文明の歴史が終わろうとしていると率直に述べている(馬場悠男『NHKカルチャーラジオ「科学と人間たちはどこから来たのか」平成27年-2015, 7月1日』)。

馬場氏によれば現在最古の人類とされるのは中央アフリカ、サハラ砂漠の真ん中にあるチャド共和国で2001年にフランス人古生物学者のミシェル・ブルネによって頭骨化石が発見されたサハラントロプス・チャデンシスであり、700万~600万年前と推定されているという。その人類700万年の歴史が終わろうとしているのである。氏が根拠として挙げたのはヨルゲン・ランダース氏のグローバル予測や総合科学研究所の『地球環境学事典』である。そして「私たちは文字に書かれた歴史によって地域文明が崩壊したことを知りながら、また最近の科学的な調査によって地球規模の文明崩壊が迫っていることを頭では知りながら根本的な対処をしない」と指摘している。この危機を少しでも回避する道として氏は文明縮小ロードマップの策定を提案する。そのモデルとして昭和20~30年代の暮らし、

あるいは江戸時代の暮らし、また古墳時代人口500万人の暮らしを挙げる。そうなれば考古学徒の出番がやって来る。庶民の住居跡によって知られる古代の、貧しいが自然を壊さない生活のスタイルから私達は多くを学ばなければならない時なのである。

(あんどう・しんさく = 泉涌寺心照殿学芸主任)

参考文献

- 安藤信策「大覚寺3号墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1976
- 井上満郎『秦河勝』人物叢書 吉川弘文館 2011
- 上田正昭『帰化人』中公新書 中央公論社 1965
- 上原真人「お稲荷さんより古い稲作」(『朱』51号 伏見稲荷大社) 2008
- 緒方泉『第26回埋蔵文化財研究集会「古代の対外交渉」追加資料発表要旨』2010
- 小田富士雄「対馬北部九州発見の新羅系陶質土器」(『古文化談叢』第5集) 1978
- 白石太一郎『考古学からみた倭国』青木書店 2009
- 関晃『帰化人』日本歴史新書 至文堂 1996
- 西川寿勝・田中晋作『倭王の軍団』新泉社 2010
- 西谷正『海を渡って来た陶人たち』吹田市立博物館 1993
- 長谷川松治訳『歴史の研究』I～III トインビー著作集 社会思想社 1967
- 馬場悠男『NHKカルチャーラジオ 科学と人間 私たちはどこから来たのか』NHKシリーズ  
NHK出版 2015
- 増田孝彦「奈良岡北古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第60号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996